

「馬場小室山遺跡フォーラム」第96回ワークショップ

【復興の原動力！パブリック・アーケオロジー2019】

馬場小室山遺跡とまちづくり環境の「かかわる」から、「山田湾文化」の「つながる」パブリック・アーケオロジーへ

＜馬場小室山遺跡と「見沼文化」研究の新展開—縄文時代の地域文化と広域運動メカニズム「つながる」の解明—＞
 知識・経験・思考・領域等にみられる現代的限界からの証拠に基づく知的解放を目指して活動します！

<p>新展開1 (ムロ1) ～ (ムロ12) は以前のレ ジューメ参照</p>	<p>「ムロさま」の 「限界領域」打破 (墓場の公共性にみ る墓式と葬式、及び 「人骨集積」・「土器 集積」・「逆位壺」等 の真相)</p>	<p>馬場小室山遺跡「第51号土壙」から展望する縄文時代の葬墓式と「土器社会論」—「ムロさま」の「累積型改新土坑墓」と「積葬墓」から探る「追埋設型土器棺集積墓」への途— (ムロ13)「土器集積の風習」と「逆位壺」が「再葬壺棺墓」の出現へ【『福島考古』60】 (ムロ14)粗製深鉢棺から「亀ヶ岡文化」南縁地域での大形壺棺の出現へ【『福島考古』60】 (ムロ15)七社宮遺跡の「大洞A1式」期初頭の「逆位人面文注口付壺」【『福島考古』60】 (ムロ16)篠ノ井遺跡群塩崎体育館地点「5号土壙」の「逆位大形壺」 (ムロ17 予告)「亀ヶ岡文化」の北縁地域における「逆位大形壺」の風習【『利根川』41】</p>
<p>新展開2 (オム1) ～ (オム7) は以前のレ ジューメ参照</p>	<p>「オムちゃん」と 「ムロさま」との 「限界知識」打破</p>	<p>土偶と土面／顔面付土版／人面文土器等の関係、そして容器形土偶／顔壺へ (オム8)青森県川原平遺跡と岩手県山田町浜川目沢田Ⅰ遺跡の人面文土器 (オム9)青森県五所川原市五月女菟遺跡の「大洞C1式」土面付鉢 (オム10 予告)千歳市ママチ遺跡の土面 (オム11 予告)「鬮體信仰」は「ムロさま」から容器形土偶や顔壺の土坑墓へ</p>
<p>新展開3 (シオ1) ～ (シオ3) は以前のレ ジューメ参照</p>	<p>「シオ(塩)もん」の 「限界経験」打破 縄文時代の製塩土 器は「探鹹・せん ごう土器」が真相！ 固形塩の物流では なく、「大形魚塩蔵 品」・「汽水系塩 (海水)煮」に留ま らず、濃縮海水を 内陸で希釈する 「淡水魚(含む特 産ウナギ)塩(海 水)煮」の普及か？</p>	<p>「製塩土器」の確立から製塩遺跡の操業へ、爆発的普及の晩期社会と「定住制」の定着 (シオ4)下布田遺跡の「製塩土器」在地性は古鬼怒湾型変遷との乖離！／枯れたアマモを特 定の場所に集めて乾燥させる「塩草場」の存在、及び天日と地熱(熱砂)利用の採 鹹・せんごう工程に相応しい「製塩土器」鉢形態の確立 (シオ5)宇都宮市刈沼遺跡からは寺野東遺跡よりも多数の「製塩土器」が検出し、在地で淡水 魚の「塩煮」が浮上。鬼怒川流域の口縁部形態は下布田遺跡(板状工具+ナデ調 整)とは大きく異なり、「古鬼怒湾系列」である口縁部水平ヘラカットが定着 (シオ6)三陸北部における「製塩土器」の年代と系統(1)久慈市大芦Ⅰ遺跡の長胴深鉢形態 と僅かな出土点数に注目した「探鹹・せんごう土器」の提唱 (シオ7)六十軒遺跡の「製塩土器」二者(古鬼怒湾ケズリ系列VS無文ナデ系列)の意義 【『利根川』40】 (シオ8)古鬼怒湾で後期中葉から大量出土の粗製土器とウナギのブツ切り「塩(海水)煮」/ 「探鹹・せんごう土器」の定着に果たす古鬼怒湾ウナギ「塩(海水)煮」に注目！ (シオ9)シカやサルが舐めていた「縄文山塩」の発見と「山塩煮」の縄文鍋 (シオ10)「微小貝類から想定される「葦灰」製塩の可能性」？アマモは「藻灰」×「草灰」○ (シオ11)「製塩土器」に観る「大宮台地系列」(馬場小室山)、「武蔵野台地系列」(正綱・下布田) (シオ12)古鬼怒湾の「魚食・塩(海水)煮文化」と加曾利貝塚の「貝食・塩(海水)煮文化」 (シオ13)「補注式灰煮沸法」は現代人のおとぎ話か？「製塩土器」の膨大な個体数と爆発 的普及に見合う「アマモ灰」製作は煮沸によるせんごう過程と二度手間非効率！ (シオ14 予告)広畑貝塚の「製塩土器」に付着した微小巻貝の観察</p>
<p>新展開4</p>	<p>「ツナがる」の 「限界思考」打破</p>	<p>「見沼文化」は「撚糸文土器」に地域文化形成としての特徴が見られ、「条痕文土器」の地点貝 塚の背景は列島における「縄文海進」のピークにおける海洋資源開発の顕在化にある。 (ツナ1)土器の施文原体として九州から北海道まで「ツナがる」貝殻を使用する風習とは？ (ツナ2)仮称「八雲式」の制定と大柄鋸歯文の来歴と組成は前後にどう「ツナがる」か？ (ツナ3)縄文時代早期とは「自然環境としての日本列島を形成し、海洋適応としての貝塚形成 の風習が九州から北海道まで「ツナがる」時代」と概念化 (ツナ4)「見沼文化」に集中する「撚糸文土器」とその直後に観られる「押型文土器」の北漸</p>

★図表や写真は著作物からの転載です。無断使用はご遠慮下さい！

1.【地域とパブリック・アーケオロジーの底力】：各地域における自然の恵みと基層文化の形成を考えよう！

1-1.【馬場小室山遺跡のクリーンアップ大作戦】：毎年5/4(みどりの日)恒例の史跡活用市民イベント

(1)「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」の現在

- ・馬場小室山遺跡クリーンアップ大作戦は、2005年5月4日に馬場小室山遺跡に集い、6月に「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」を結成すると共に、大田堯先生を実行委員長としてお迎えし、周辺にお住いの方々や関心をお持ちの市民の方々へも呼びかける活動は2006年5月4日から始め、とうとう今年は5月から元号も令和に替わり、令和元年の馬場小室山遺跡クリーンアップ大作戦となりました。
- ・元号が平成から令和へと替わる新たな時代となった今、昨年(2018年12月23日)には大田堯先生が逝去され、そして翌年(2020年)には15年目という節目を迎えます。この間に馬場小室山遺跡にはかなりゴミが少なくなり、飯塚邦明さんのジャズピアノ・コンサートでは毎回「小室山のテーマ」が紹介されていますし、国立科学博物館のイベントや市民活動サポートセンター関係のフェスティバルでは井山紘文さん制作ジオラマが常に人気を博してきました。加えて文化財保護課以外の部局でも広報誌に馬場小室山遺跡について記事を掲載する等、市民の方々にも従前とは比べ物にならない程に認知されてきたように思えます。また、文化財保護課も2004年の騒動当時の役職者は既に全員が退職され、担当の新陳代謝も図られてきましたので、心機一転を期待したいと思います。
- ・さて、これまでの活動記録についてはどなたでもインターネットを通じて簡単に知ることができます。活動全体のルポは藤由美さんのホームページ「さわらび通信」に丁寧に紹介されていますし、保存に関わる発信情報は全て杉田秀一さんのホームページ「馬場小室山遺跡・緊急特設ページ」にアーカイブされています。このお二人のご協力無くして馬場小室山遺跡がこれほど世に知られることは無かったと思います。

- ・考古学研究としては内容が不明なまま外見だけで勝手に所謂「環状盛土遺構」と一括されてしまった縄文むらですが、馬場小室山遺跡の研究は言葉遊びの概念ではなく、先史土器の研究を範とし、標本を用いた異同により概念の当否や事実関係を追求することを目指しました。その結果、「環堤土塚(通称「縄文塚」)」という概念に至りました。それよりもむしろ重要なのは馬場小室山遺跡に特有の「第51号土壌」です。縄文時代晩期になると列島の至る所で再葬墓の痕跡が顕著になりますが、大宮台地における再葬墓の典型として「第51号土壌」を考察することが出来ました。かつて所謂「再葬墓」は杉原荘介により東日本弥生時代形成の時代概念と力説されましたが、縄文時代の葬送イデオロギー現象と解する方が適切ですので、馬場小室山遺跡から新しい葬墓式研究を展開しました。

(2)「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」の今後

- ・そこで改めて馬場小室山遺跡の今後に向けて私たちができることを話し合いたいと思います。馬場小室山遺跡クリーンアップ大作戦はゴミの減少と共に青空考古学教室の充実が図られ、今日では馬場小室山遺跡は市民との交流の場として定着しつつあります。その推進力は飯塚邦明・一恵ご夫妻の学校教育等を通じた人脈、及び井山紘文さんの画家活動を通じたPR効果に負うところが極めて大きいです。拡大を目指す事業は必ず失敗するというのが平成の教訓ですので、大きなイベントではなく、定着した地道な活動を継続することが望ましく思います。
- ・考古学研究面では、馬場小室山遺跡を形成する「縄文文化とは何か?」、そして馬場小室山遺跡の次に形成される環濠集落の「弥生社会とは如何にあったのか?」というパブリック・アーケオロジーからの必然の問いに対し、権威や通説ではなく、検証可能なエビデンスから立ち上げる接近法に学ぶ構えが望まれます。これには五十嵐聡江さんが休眠中の斎藤瑞穂さんに替わって牽引している「山田湾まるごとスクール」のパブリック・アーケオロジーによる交流の実践が有効に思えます。未経験のフィールドに立ち、都会での常識を払拭し、未経験の環境や生活を学ぶことにより改めて地域研究へと接近するならば、これまでの考古データの解釈を抜本的に見直す契機と共にトレーニングとなり、権威や通説とは異なる新たな視点の獲得が期待できます。馬場小室山遺跡の「見沼文化」と「山田湾文化」の考古データをエビデンスとする比較考古学を立ち上げ、「ツナがる」をキーワードに「交流」をテーマとした新たな研究展開を図りたいと思います。ここに至りますと、これまで継続しているワークショップ名も名称を改め、第101回からは「馬場小室山遺跡交流会」の例会とし、「山田湾まるごとスクール」も同時に考えている交流趣旨との整合を図りたいと思います。
- ・従って、2020年度からは以下の3体制で事業を進め、3体制は人材面では密接不利な関係にあるものの、事業面では機能別に独立する形態(スタッフラインー第三セクター)にあり、全体のガバナンスはこれまで通り、母体であり象徴である「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」に収斂していきます。

<市民との交流会>「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」：毎年恒例5/4のパブリック・アーケオロジー

<都市型交流会>「馬場小室山遺跡交流会」：異業種学際的アプローチも含む考古学の交流と社会化

<被災地との交流会>「山田湾まるごとスクール」：都市型から地方型へのパブリック・アーケオロジー展開

1-2. 【青空考古学教室】：馬場小室山遺跡や縄文時代を理解するための市民向け考古学入門ワークショップ

(1)馬場小室山遺跡と国史跡・井野長割遺跡(佐倉市)の交流事始め

・八千代栗谷遺跡研究会のフィールドである「印旛沼文化」の井野長割遺跡から「見沼文化」の馬場小室山遺跡がどのように見えるか、紹介して頂きます。井野長割遺跡も「土塚」(「縄文マウンド」)が顕著な外観に特徴がありますが、「地中の秘密」に大いに興味があります。馬場小室山遺跡の「安行3c・3d式」むらづくり作法に対して井野長割遺跡の「姥山Ⅱ・Ⅲ式」・「前浦式」むらづくり作法はどのようなものか、大いに興味があります。

(2)「土塚」を形成する縄文時代後晩期土器の学び：土器の作り手から交流を考える！

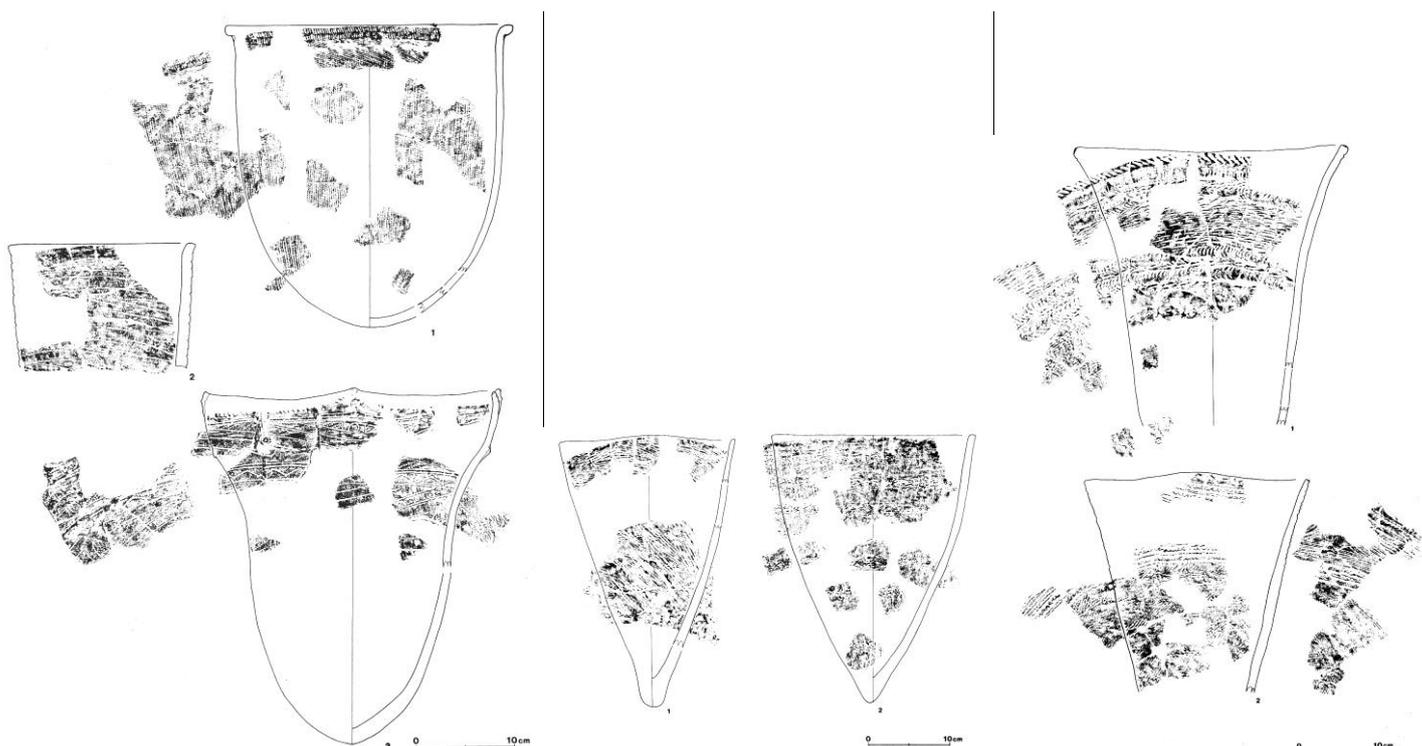
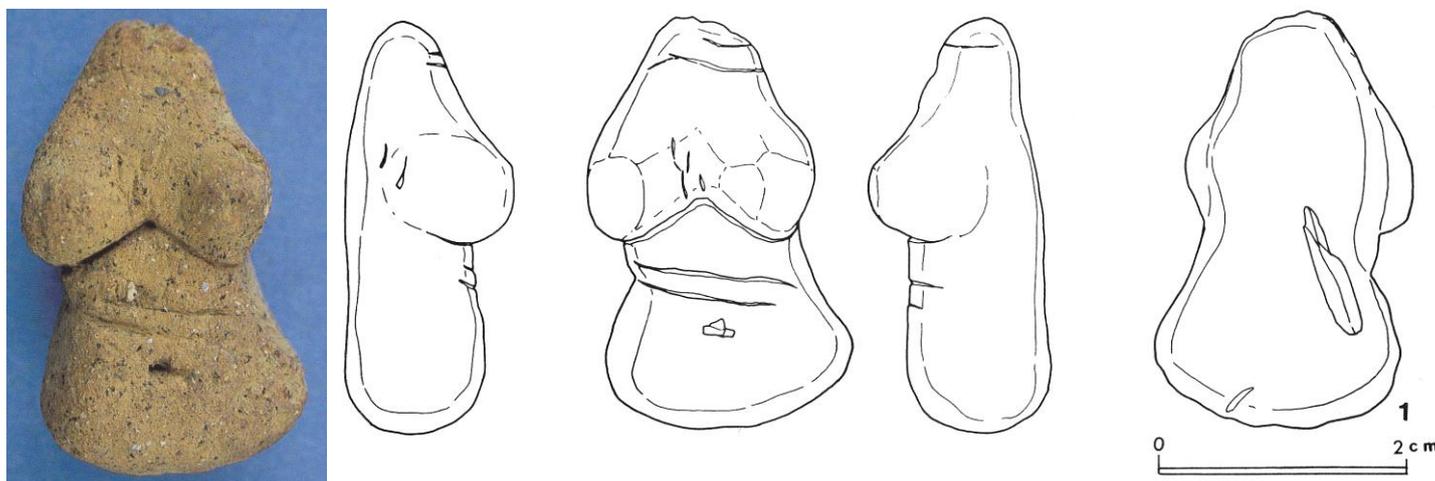
・馬場小室山遺跡と井野長割遺跡の後期後葉から晩期初頭は「土器型式」に類似する面が多く見られますので、「安行2式」～「安行3a式」を中心に前後の波状口縁土器を具体的に分類し、参考に供したいと思います。

(3)土偶の不思議：縄文人の非日常に対する表現法(形態と装飾)を読み解きます。

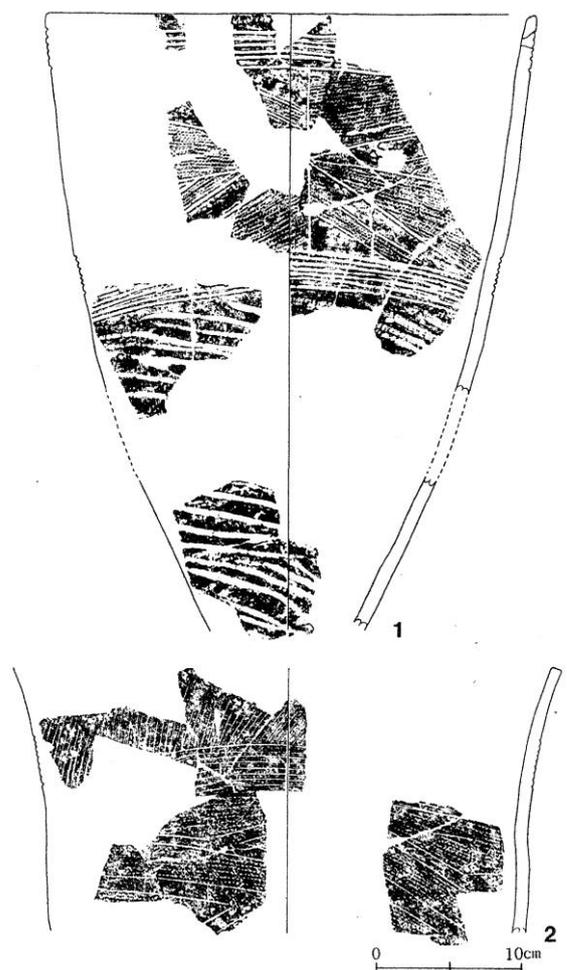
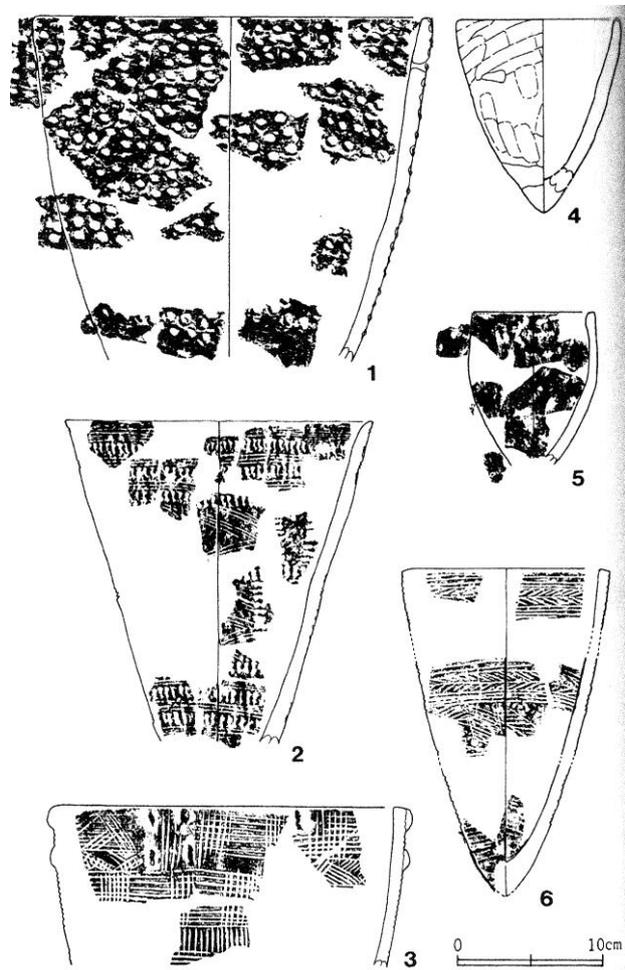
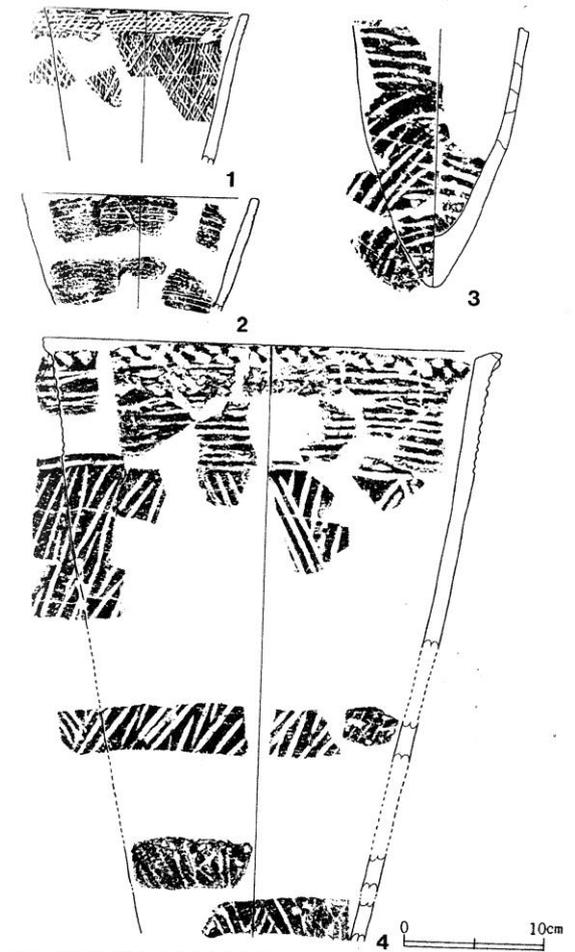
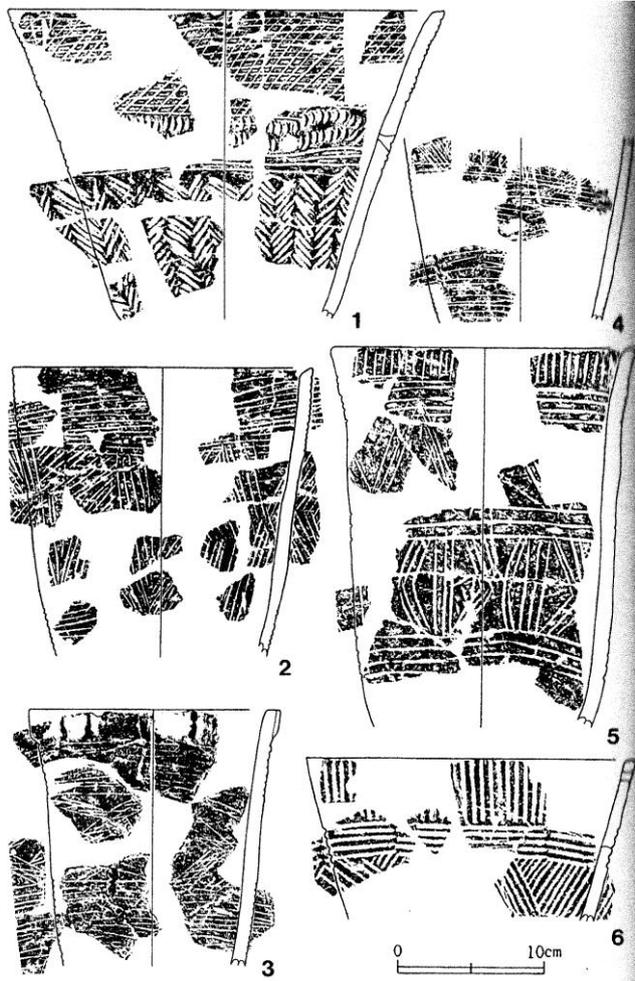
・馬場小室山遺跡の南東100m位隣には氷川女体神社へと開口する巨大な谷がありますが、この左岸の台地上に松木遺跡が所在します。松木遺跡からは小形で顔面表現の無い立体的な乳房を表現する土偶が包含層から出土しました。包含層出土土器は「撚糸文土器」、早期前半の「沈線文土器」、前期の「諸磯式」や「浮島式」等ですが、果たして松木遺跡の土偶は誰が制作したのでしょうか？

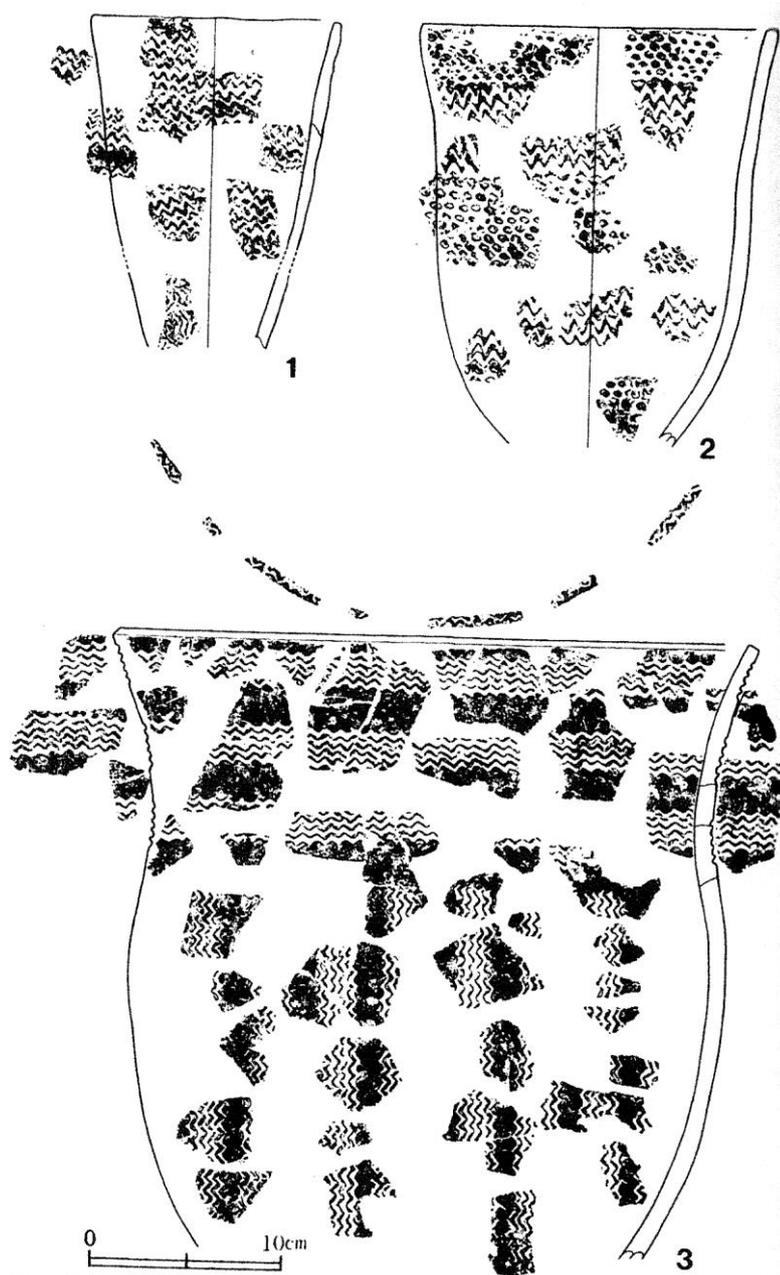
1-3. 【馬場小室山遺跡周辺「縄文銀座」への誘い】：「見沼文化」の縄文時代拠点地域を知る！

(1)松木遺跡：井山紘文さん宅から南東に落ちる大きな谷に沿った台地縁辺に広く展開



(2)北宿西遺跡 : 飯塚邦明さんの東大能研三室校舎の隣接する北宿通りの西側





1-4. 【「山田湾まるごとスクール」事業関連】： 第7回「山田湾まるごとスクール」の方針検討

(1) 2019年度交流計画の検討

- ・第7回「山田湾まるごとスクール」日程の決定とホテルの予約。
★9/6(金)～9/8(日)に決定
- ・川端弘行コレクションに加えて今年は新たに「郷土食」について学びます。
尚、有志による現地での下見や事前調整日程も決定します。
★6/21(金)～6/23(日)に決定

(2) 第7回「山田湾まるごとスクール」の準備： 5/4にホテルを予約します。

- ・「愛」をテーマに郷土食の一昔前を学び、縄文土器(川端弘行コレクション)や土偶に表現された「愛」を発見します。土器を製作する女性の視線を感じ取ることができるかどうか問題です。
- ・安井健一さんには出現期の土偶に象徴される形態や、母親としての視線が感じられる土偶について紹介頂きたいと思います。
- ・五十嵐聡江さんが『山田町史 上巻』の年中行事を参考に郷土食データを整理し、調査票として活用予定。私たちの「お米サンタ」活動の参考としても、北浜と大浦の方々から近現代のお米事情についてご教示頂ければと思います。
お米と言えば弥生時代ですが、山田湾の弥生時代についても理解を深める機会を得たいと思います。

(3)山田湾の弥生時代を考える！

- ・「郷土食」に学びつつ、山田湾の弥生時代遺跡の立地や集落の形態、そして「土器型式」の吟味を踏まえ、農業集落の是非(米食？雑穀？)、はたまた海へのアクセスでもないならば、果たして生業の基盤を何に置いているのか、改めて「サケ・マス」論の意義を見直す契機にしたいと思います。
- ・具体的なデータは以下の論文を参考にします。

齋藤 瑞穂 (2018)「第6章 三陸・山田湾沿岸の弥生土器型式—弥生三陸地震津波研究—」『弥生土器型式細別論』、同成社

(4)防潮堤哀歌：川端弘行さんの日常

- ・「震災から8年、防潮堤がやっと進んで来て、我が家から山田湾が見えなくなり淋しい気持ちであります。」というメッセージを頂きました。大浦で生活している人々にとり、海が見えなくなることは、塀の中にいるような心境でしょうか？安全をもたらすはずの防潮堤、心境は安心なのでしょうか、現地で考えたいと思います。

2. 日本考古学における坪井正五郎の役割：現代考古学の大きな蹉跎からの学び直し

- ★戦前にその学問が正しく評価されることは無く、山内清男が研究に一段落した晩年に読み込みを行い、自らの先史考古学の目的として坪井正五郎に学んだ視点を設定したことはあまりにも著明です。特に「コロボックル風俗考」は人種論として矮小化される傾向が強いですが、斎藤忠のみが坪井の意図を素直に評価しています。
- ・「加曾利B式」を概念制定以後からとらえるのではなく、今日「加曾利B式」と呼ばれている土器に対し、明治時代の研究者はどのように接近したのか、研究者と土器との相互関係を議論します。『アルカ通信』No. 136／第1回(2015-1-1)から隔月ごとに連載を開始し、現在は『アルカ通信』No. 188／第27回(2019-5-1)です。

第1回：非歴史的な再構成の構え	／	第2回：羅針盤なき航海と新たな地平	／	第3回：進化論の枠組みから社会論へ
第4回：西ヶ原貝塚はモースの近代化	／	第5・6・7回：土器片研究の指導方針・その1／その2／その3		
第8回：椎塚貝塚の加曾利B式	／	第9回：モースの層位論と遺物包含地	／	第10回：定量的選択と定性的相異の振り子
第11回：「椎塚形」とモースの土器区分	／	第12回：世界に伍する日本考古学の確立	／	第13回：モースの定量的選択と分類の曙光
第14回：クロス土器と標本の新たな役割	／	第15回：椎塚貝塚の巨大深鉢と粗製土器	／	第16回：日本石器時代総論に向けて
第17回：中間二立チ其連鎖トナルベキ遺跡	／	第18回：「コロボックル風俗考」への転換	／	第19回：「コロボックル風俗考」の落し物
第20回：「コロボックル風俗考」による革新	／	第21回：「標本たるの価値」を超えて		

『アルカ通信』No. 178／第22回(2018-7-1)：「器物形状の一致」との対峙へ

『アルカ通信』No. 180／第23回(2018-9-1)：「拳形」突起集成の目的と俯瞰

『アルカ通信』No. 182／第24回(2018-11-1)：型式学の曙光

『アルカ通信』No. 184／第25回(2019-1-1)：類似度順序形態学の学史的位

『アルカ通信』No. 186／第26回(2019-3-1)：沼田頼輔の「把手の分類」考

『アルカ通信』No. 188／第27回(2019-5-1)：「沼部式」から「御所見式」へ

3. 【その他情報交換など】：自由な意見・情報交換とワイン・アーケオロジー

3-1. ワークショップ関連予定

・6/21(金)～6/23(日)：「山田湾まるごとスクール」第7回の下見と事前調整

・7/7(日)：第97回ワークショップ

・8/4(日)：第98回ワークショップ

★7/24(水)～8/11(日)：遥かな縄文土器(井出政男個展)ワークショップ

・9/6(金)～9/8(日)：第7回「山田湾まるごとスクール」

・9/28(土)：「高井東式」の話(於：桶川市べに花ふるさと館)

・12/1(日)：飯塚邦明ジャズピアノコンサートNo. 13

★第99回ワークショップ後、希望者で文化センターへ

3-2. ワークショップ名のこれまでの履歴と今後の変更予定(検討中)

・第1回～第40回：「馬場小室山遺跡研究会」ワークショップ

・第41回～第42回：「馬場小室山遺跡に集う見沼文化フォーラム」ワークショップ

・第43回～第99回：「馬場小室山遺跡フォーラム」ワークショップ

・第101回～：「馬場小室山遺跡交流会」例会 ★「山田湾まるごとスクール」の趣旨を尊重した命名

3-3. その他

以上